

## CURES Salon

## 色彩について

加藤 峰 弘

ほくは大学2年のとき、一般教養科目の一つとして芸術学を履修していました。そのときの自由課題レポートでテーマとして「色彩」を選んで以来、ほくは色彩について“いろいろ”と興味をもつようになりました。

てなわけで、ここでその成果（といっても、たいしたものじゃありませんが…）の一端を簡単に披露しましょう。

まず、色のイメージについて。わたしたちは意識している、していないかは別にして、おのおのの色に対して特定のイメージをもっています。では、純色のいくつかのそれについて述べましょう。

① 赤：赤色を連想させるものは「炎」です。ここから、この色は情熱や積極性を象徴する色ということになりました。3年ほど前のドラフト会議のことですが、近鉄バッファローズの佐々木監督がPL学園の福留選手をなんとしてでも引き当てようと、気合いを入れるために、風大左エ門（注：いなかっぺ大将）のように「赤」<sup>ふんどし</sup> 褌をしめて会議にのぞみ、見事、当たりクジを引き当てました。このことは記憶に新しいことと思います。その瞬間、「ヨッシャー！」の掛け声が会場中に響き渡りましたよね（結局、同選手は入団しませんでした…）。

② 青：青色を連想させるものは「空」と「海」です。どちらもちっぽけな人間に比べ、無限の広がりや深さを感じさせますよね。大

自然の前では、個々の人間はあまりにも無力です。ですから、それに自らを適応させて、つまりそれとの「調和」を図って生きていくしかありません。同時に、空や海を見ると、無限で均一な青色の中に吸い込まれていく感覚、つまり「浸透」感を感じますよね。この感覚は、統一性、共通性といった「調和」、あるいは「和」と密接に関係する概念と結びつきます。以上のことから、この色は「調和」や「和」を象徴する色ということになりました。共同作業、つまり「和」が必要とされる工場や現場の労働者の方々のことを、とくに「ブルーカラー」と呼びますよね。

また、少し前までの日本では、青色という調和とともにさわやかさをイメージさせる色でした。空はライトブルーなので、この影響が強かったからでしょうか。ですが、近頃では、青色というと憂鬱や冷たさをイメージさせる色に変わりつつあります。なんとなく気分が晴れない日などは、「今日はなんだかブルー」なんて言い方をよくしますよね。アメリカでは、ずっと前から青色は憂鬱や冷たさをイメージさせる色でした。ダークブルーの海の影響が強かったからなのでしょう。日本で、青色のもつイメージが変わりつつあるのは、各方面で進んでいるグローバル化のせいなのかな～、なんて考えたりもします。

③ 黄：黄色を連想させるものは「ひよこ」です。ひよこは親のニワトリによって保護さ

れなくては生きていけません。ここから、この色は「依存」、「甘え」、それに「未熟」を象徴する色ということになりました。幼稚園児や小学1年生は、毎朝、黄色の帽子をかぶって登園、登校していますよね。このことは、どちらも保護を必要とする存在であることを意識的、無意識的に（つまり潜在意識に働きかけるかたちで）周囲の人たちに認識してもらうために行われています。

④ 緑：緑色を連想させるものは「森林」です。精神的、肉体的に疲れたときに木の葉が生い茂り、緑につつまれた森を眺めると、なんとなく気持ちが和みますよね。同じく、街路樹のおかげで喧騒に囲まれた都会はどれほど潤いを得ていることか。ここから、この色は「温かみ」を象徴する色ということになりました。

⑤ 白：白色を連想させるものはとくにありませんが、まったく汚（けが）れのないということから、嘘偽りのないこと、つまり「純粹」を象徴する色ということになりました。ウェディング・ドレスは純白でないと、花嫁さんの初々（ういうい）しさが積極的に表現できませんよね。

⑥ 黒：黒色を連想させるものはカラス…じゃなくて、白色と同様に、とくにありません。この色は、憎しみ、悲しみ、哀れみなど、どんな気持ちをも覆い隠してしまう、「隠蔽」を象徴する色です。感情を押し殺すところから、大人の色というイメージが定着しています（社会人はつねに自分の感情を押し殺さねばならない場面に直面しています）。バリバリのキャリア・ウーマンなどは、黒色を基調としたシックなスーツをピシッと着こなして、颯爽と街を闊歩していますよね。

また、お葬式のときになると、白色と黒色とを交互に繰り返す垂れ幕が施されますよね。

この垂れ幕は、故人を敬うこと、つまり白色は故人に対して純粹無垢の気持ちでのぞむということ、黒色は自分の故人に対して抱く、心の奥底の感情はここでは隠蔽するということを表現しています。喪服が黒色である理由もこれと同じです。

とまあ、以上のように、純色のいくつかに対してわたしたちが抱く特定のイメージについて若干、述べさせていただきました。付言すると、個々の人たちが好む色とその人の性格には、程度のほどは分かりませんが、相関関係があるそうです（たとえば、赤色を好む人はアグレッシブであるとか、青色を好む人は協調性に優れているとか、黄色を好む人は依存性が強い、つまり甘えん坊であるとか、緑色を好む人は包容力に溢れているとか…）。また、このことと関連して、服装の色を見れば、その人のその日（ないし朝）の気分がある程度、判断できるそうです。どちらも、当たるも八卦、当たらぬも八卦ですけどね。

では次に、色彩とオフィス空間や生活空間の関係について述べましょう。以前、NHKラジオのとある番組に米国出身の女性のカラーコーディネーター（ご本人は“カラリスト”と称していました）の方が出演していました。彼女によると、オフィスの色調とその企業の作業能率、それに生活空間の色調とストレスの程度には相関関係があるそうです。たとえば、ベージュやグレーを色調としたオフィスでは、社内の活気とか社員の士気がいまひとつ盛り上がりません。また、黒と白が鮮やかに対照をなす色調（大体大のラグビージャージを想起してください）の生活空間は、見映えはいいものの、その部屋で暮らす人たちにかなりの大きさのストレスを与えつづけます。なぜなら、色彩のコントラストが強烈すぎ、したがって眼にも刺激が強すぎるからです。

(一般的に言って、鮮やかすぎる色彩を基調とした空間は、その場所で長期間過ごす人たちにとっては知らず知らずのうちにストレスを蓄積させる要因となります)。また、病院では赤色や青色はご法度となります。前者は患者さんたちに血液を連想させ、後者は冷たさを感じさせるからです。では、どうすればいいのでしょうか。彼女によると、オフィスや生活空間にマッチした色調は定式化できず、個別に環境調査を綿密に行わないと分からないそうです。日本では、あまりオフィスや生活空間のカラーコーディネートは注目されていませんが、以上のことを考えると、もっ

ともっと注目されてもいいかもしれませんね。

以上、このショート・エッセーでは色彩についてあれこれ論じてきました。色彩がわたしたちの生活に密着したものであることを、ほんの少しだけでも分かっていたら、幸いです。たとえば、学生のみなさんは、普段はシックなスーツしか着てこない女性教員がめずらしく真紅のスーツを身に纏<sup>まと</sup>ってきたら、「おおっ！〇〇女史、今日は気合い入ってるぞー」な～んで想像をめぐらすのも楽しいかもしれませんね！

(金沢大学経済学部講師)

## 地域経済文献情報

"Lekuthai, Phaisal", Rural Development Planning --- A Case Study of Korat Province in Thailand (国際開発研究フォーラム (名大), 5, 1996, 3-34)

"Mak, James ; Moncur, James E.T.", Political Economy of Protecting Natural Resources for Recreation (国際協力論集 (神大), 4(1), 1996, 73-100)

"Nagaoka, Nobutaka", Social Democracy and Sustainable Development (経済論叢 (京大), 156(4), 1996, 83-101)

"Obedoza, Romeo B., Jr.", Rural Development--The Case of the Philippines. (国際開発研究フォーラム (名大), 5, 1996, 35-66)

秋元 律郎, 都市化社会における高齢化と地域社会 (社会科学討究 (早大), 42(1), 1996, 1-29)

秋吉 祐子, 三峽ダム建設にともなう住民移転問題 (M A C R O R E V I E W, 9(1), 1996, 77-92)

渥美 公秀, 坂井 正他, NPOと自治体サービス (特集) (地方財務, 508, 1996, 13-55)

天谷 永, 自然環境の質と存在価値の新しい概念について (創価経営論集, 21(1), 1996, 87-96)

新玉 正男, 齋藤 博他, 阪神・淡路大震災復興の現状

と課題 (シンポジウム) (日本不動産学会誌, 11(2), 1996, 3-36)

新家 健精, 福島県における高度情報化の歩み (福島大地域研究, 8(1), 1996, 3-29)

井内 昇, 新しい都市開発と 20 世紀の教訓 (1) (都市問題, 87(8), 1996, 83-96)

五十嵐副夫, 一極集中に関する一考察 -- 理論と現状 (経済論集 (分大), 48(1/2), 1996, 1-19)

石川 明美, 妹尾 勝子, 広島の新交通システムがもたらす暮らしの豊かさ (生活経済学研究, 11, 1995, 21-36)

伊藤 維年, 今後のテクノポリス建設とテクノポリス開発機構の課題 (産業経営研究 (熊学大), 15, 1996, 1-15)

伊藤 達雄, 「中部一体化論」とその周辺 (法経論叢 (三重大), 13(2), 1996, 1-15)

伊藤 達雄, 伊藤雅一他, 都市総合計画の体系的立案手法に関する研究 -- 三重県津市を事例として (法経論叢 (三重大), 13(1), 1995, 1-22)

入江 重吉, 環境思想の新しいパラダイム -- 人間中心主義の批判 (松山大論集, 8(1), 1996, 186-168)